「決断力」養った 多忙な活動

詩人・童話作家 尾崎 美紀さん(70)＝1967年卒

＝久保玲撮影

おざき・みき　1948年生まれ。旧姓・重本。85年度「まさかのさかな」で第2回日産童話と絵本のグランプリ受賞、91年に「あたしのいもうとちゃん」で第8回小さな童話大賞の今江祥智賞など。毎日新聞の「読んであげて」で「お繕いいたします」を連載。絵本「のどぼとけさん」など数々の出版がある。

姫路西高校 ＝兵庫県姫路市

わたしの母校

兵庫県立姫路西高校で女子生徒として初の生徒会長となった、詩人・童話作家の尾崎美紀さん(70)。学校行事の企画や調整など、西高で得たのは「決断力」だ。「勉強は好きで楽しかった」が、家庭の事情で大学進学はせず高校卒業後に就職。つらい出来事も重なったが、言葉をつむぎ、心が温まる作品を生み出し続けている。【前本麻有】

■大学進学を断念

谷川俊太郎さんの詩に感動し「物書きになる」と心に決めていた。だから高校では文芸部とESS部を掛け持ち。文芸部では詩や青春小説を書いた。英語の松村好浩先生は英語でなければ質問を受け付けてくれなかったので、ESS部では実践的な英語を使おうと心がけた。姫路に工場があったスイス食品大手「ネスレ」のハンゼルマン工場長をゲストに呼び、「生きた英会話」を交わした。自分で買った英会話カセットテープを「ブチンとテープがすり切れた」ほど聴き、友人から代わりに質問を頼まれるまでに英語力は上達した。

ところが高校2年の時、父が興した証券会社が倒産。先生たちは「奨学金がある」と声を掛けてくれたが進学を断念、ハンゼルマン工場長との縁でネスレへの就職を決めた。

そんな困難と同時進行で学校生活では初の女子生徒会長に。ハイレベルな授業、勉強漬けの生活に「灰スクール」と自虐的に表現する同級生もいたが、自分は好きな部活動をして、家庭事情が苦しくても学校は楽しくて仕方なかった。「今でもなんで生徒会長に選ばれたか分からへん。とにかく『生徒主導でやっていこう』って呼びかけたのが良かったんかな」

■答辞は「長詩」で

「昼ご飯をちゃんと食べた記憶がないねん」と振り返るほど、生徒会は多忙だった。県立姫路東高校との初の「東西高校体育大会」の実施に向けて調整に奔走。さらに文化祭などの企画や準備に追われた。「相手が先生でも上級生でも言わなあかんことは言う。前に進む決断力が身についた」

卒業式では「ありきたりなのは嫌やった」と答辞は「詩」でやりたいと申し出た。リズム良く、学舎での思い出を詩で振り返った。中学時代の恩師が「生涯で一番良い詩を聴いた」と褒めてくれたのがうれしかった。

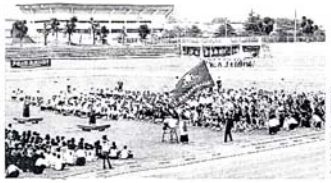
20歳で結婚し、3人の娘を出産。義理の両親も含め9人家族の家事を担った。それでも夜中に書籍や図鑑、地図、英和辞典などを読み続けた。「詩も童話も発想力が大事だから」。40～50代は義母と両親の3人の介護に追われたが、そこから認知症を描いた絵本「あたしのいもうとちゃん」が生まれた。

2013年に夫の至宏さんをがんで、その2年後に長女・裕子さんが過労で倒れて亡くなった。つらい別れが相次ぎ、落ち込んだ。それでも「立ち直らなければ」と詩集「出発はいつも」を書き上げた。「前に進まなあかんやんか。今、書こう！と思い立った時、一気に作品ができる」。西高で培った「決断力」が今も、創作活動も支えている。

東高と「東西高校体育大会」

姫路東高校との第1回「東西高校体育大会」は1965年6月30日に姫路西高校で行われ、今年の開催で55回目を迎える。両校は48年の学制改革により「姫路新制高等学校」と「姫路女子新制高等学校」の生徒と教職員を折半交流して、姫路西高と姫路東高となった経緯がある。姫路西の学校史によると、51年には野球部同士による対抗戦が行われる親交があったことから、生徒会を中心に両校対抗戦の開催の声が上がった。

当時の記録によるとバスケット、バレー、卓球などの7種目から始まり、次第に「エール交換」や全員参加の「フォークダンス」も加わった。当初は両校のグラウンドで交互開催していたが、現在は姫路市立陸上競技場などで実施。多くの3年生にとって「最後の試合」になるため白熱した戦いが繰り広げられる。今でもフォークダンスが行われ、応援合戦（エール交換）は目玉の一つだ。



盛り上がる応援合戦 ＝姫路西高校提供